

エッセー

全カ力で学んだこと、感じたこと

全学共通カリキュラム運営センター英語教育研究室／
異文化コミュニケーション学部教授 川崎 晶子

2002年度から17年間の立教での教員生活がもうすぐ幕を閉じる。前任校の17年間とあわせこれまでの人生の半分強を大学教員として過ごし、さまざまなことを体験し学ぶことができた。立教での半分は、全カ力英語教育研究室（英語研）室員として全学共通英語カリキュラム作りや運営に関わった。半分は専門の社会言語学で、特に異文化コミュニケーション学部ができてからは言語学や社会言語学の面白さやそこから学べることを学生たちに伝えることができた。この2つは私の中では相乗効果があり、両方やってきたことを幸せに思う。そして、忙しいが活気があり、教育熱心な大学にいられたことに感謝している。

英語教育に関しては、運用力の向上と、英語を通して学べるアカデミックスキルや社会や世界を見る目の育成をカリキュラムの中にどう織り込んでいくかを考え続けてきた。英語の授業で？と疑問に思うかもしれないが、英語の授業ゆえに単純化され、意識的に学習できるという面もある。例えば、プレゼンテーションの授業では、英語の典型的なアウトラインを使いながら身近な話題を、調べ、考え、図表を使って発表することが、思考力、研究力、発表力を養成する一歩につながる。ライティングで引用や参考文献の書き方を教えるが、これは、剽窃禁止を教えるよい機会になっている。高校までに培った基本的な英語力を運用しながら、大学生に求められる言語運用力に仕上げていくのが大学の英語教育だと考えている。

私が赴任した頃は、英語研は1997年度に始まった全カ力の内容の充実に多大なエネルギーを使っていた時期だったのだと思う。LCC（Language & Culture Course：言語文化コース）とCOC（Communicative Course：コミュニケーション・コース）の2つのコースがあり、必修科目の種類も多く、また、その中の複数の科目で自作の教科書やビデオ教材、テスト等が使われていた。そして、学期ごとに学生と担当者のアンケートを集計し分析、改良点を見つけ、統一シラバスや教科書の見直しをする。各学期に2回、担当者全員が一堂に会するFDがあり、立教の英語教育の全体像、担当する授業の位置付け、目的ややり方を担当者がよく理解できるようになっていた。FDの大切さを痛感した。一方、自由選択科目も多種あり、中にはかなり担当者の裁量に任されているものもあった。「ドラマで学ぶ英語」の担当になった時は、グループごとに「桃太郎」などの日本の昔話の英語の脚本を作り、短い紙人形劇にして練習した。最後には、立教小学校とお茶の水小学校の帰国子女クラスで上演したグループもあり、楽しい思い出である。

毎学期の改良は時には大きな変革になる。2006年度には、「異文化理解・対応能力と発信型言語運用能力の育成」という全カリ言語教育の理念を前面に掲げ、コースは2つのまま必修科目の大整理が行われた。LCCの週2回同一担当者の授業は、新しくECU (English for Cultural Understanding : 文化理解の英語) になり、私はその親シラバス作りに夢中になった。教科書以外のさまざまなリーディングやアクティビティーの教材を共有するため、ECU ウェブサイトを立ち上げた。「大きなエクセル表に教材が載っていて、タイトルをクリックすると家でもダウンロードができる教材共有サイトがほしい」という発案を受け、パソコン上手がウェブサイトを作り、ルール名人がウェブ掲載許可の取り方の解説を書き、教材コレクターが厳選した教材をエクセル表に入れながら他の人のものも整理する。それぞれが得意なことを発揮しECU ウェブサイトは動き始めた。問題もいろいろあったが、今では、英語研の提供科目全部をカバーする「TeachNet」に進化、便利に使われている。新しいものを作る共同作業の面白さと、適材適所の働き方の利点を感じた。

2006年度から3年間、英語教育研究室(英語研)の主任が回ってきた。合い言葉は「Team Rikkyo」。情報共有を増やし、先生同士が相談しあえるような仕組みを工夫した。「Team Rikkyo」は英語研から外にも輪を広げた。LL教室で大規模授業が始まり、メディアセンターとの連携は必須になった。対応の早さ、質の高さに安心し、頼り、さまざまな相談に乗ってもらった。業者との連携も生まれた。「Rikkyo English Online (REO: リオ)」のもとになっている「スーパー英語」との出会いもこの頃だった。業者にこちらのやりたいことを伝え、デモをもらい、体験し疑問が生まれれば質問し、こちらもほかに使いたいところややりたいことがないかを考える。一緒に考えてくれる業者との出会いで、共同作業での学び合いの効果の大きさを知った。主任の時期は、連帯感の重要性やいかに周りの協力でものが回るかを実感したときでもある。

一方、英語研はとんでもない状況の中にいた。大学はそれまで週4回あった1年の必修英語を週3回にすると決定し、その上でもっと効果的な英語の授業を提供することを英語研に求めた。私は作りたてのカリキュラムを4年間で終わらせ、2010年度から始まる全カリ第2ステージを推し進める立場になってしまった。その中でも特に、他大学を見学し、担当者の話を聞き、立教の学生には8人がベストと決めたディスカッションクラスは、学内で猛反対にあった。4,600人の1年次生8人で1クラスを作ると、1週間に575コマの授業を展開しなければならない。40人以上の新しい先生が必要になり、その管理部門も必要。お金がかかる。教室も足りない。そもそも人と話すのが苦手な学生はどうするのか、等々、さまざまな質問に答える日々が続いた。後半は主任に加えて総長室調査役も兼務し、2010年度カリキュラムの実現を目指した。先生の管理という発想、教室の数、時間割など、どう考えたらよいのかも分からない。そんなとき、立教の職員の人たちの能力の高さを知った。時間割案、再履修のシミュレーション、雇用条件、契約書案、等々、さまざまなセクションで次々と資料が作成された。第2ステージはそれぞれの分野の知の集結で出来上がっていった。

英語研もディスカッションに有効なファンクションを選び、リーディング教材を作り、パイロット授業を行い、また、他の必修科目であるプレゼンテーションやライティング、e ランニングの統一シラバスを練り、2010 年度を迎えた。新カリキュラムが始まっても、ディスカッションはなぜ 8 人でないといけないのか説明を求められ続けたが、学生の授業評価は「先生の説明や指示が明確で (91%)、英語で話す機会が十分にあり (91%)、ディスカッションの授業に満足している (87%)。ディスカッションクラスのために開発されたファンクションは役に立つ (86%)」(2010 年度後期アンケート結果より) など、これまでの英語クラスでは見られない高評価であった。毎学期、高い評価が続き出席率もよく、ディスカッションクラスは立教に受け入れられ、立教の特徴のある授業の一つになっていった。よいものは残ると感じた。

新カリキュラムも軌道に乗り、2012 年度から 3 年半は、英語の枠を越えてランゲージセンター (LC) 長を務めた。英語・ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語・日本語の先生たちはそれぞれユニークでちょっとずつ違う。違いに意味を見出す社会言語学の視点が刺激された。ただ、LC は教育講師の居場所という中途半端な組織で、大学組織図にやっと名前を見つけたが言語教育との関連が見えず、任期付の先生方の就活において不利な状態だった。そこで、2014 年度に LC のホームページを作った。先生たちの仕事や研究内容が明確になり、今はイベント情報なども載っている。必要と思ったら、ともかく着手できることをやってみる、やり始めれば結果はついてくると思った。

以上、立教の全カリでのさまざまな体験を大復習し、沢山のことを学ばせてもらったことに改めて気づいている。日常の業務は限りなくあり、英語研の仲間や全カリ事務室の人たちはいつも忙しい。そんな中で私の経験は、エネルギッシュな先生たち、優秀な職員や事務室の人たち、そして、有能な業者の人たちがいつもどこかにいての共同作業が多かったと思う。立教オリジナルを共同作業で作っていく面白さがそこここにあった。自分の力は微々たるもので、周りの皆さんのそれぞれ違う才能に助けられいろいろなことができていたのだと思う。沢山の人の顔が頭に浮かぶ。素晴らしい方々との出会いだった。ありがとうございました。

かわさき あきこ